

夫婦のライフスタイルと養育環境との関連 —養育行動観察を用いた検討—

川 島 亜紀子

(日本学術振興会特別研究員 PD (千葉大学))

問題と目的

近年、我が国において様々な格差問題に焦点が当てられている。2009年に公表された、全国学力テストの成績と親の収入との関連に関する結果は、教育格差の実態の一部を示すものとして、マスメディアでも大きく取り上げられた(読売新聞, 2009)。この記事では、家庭の収入という経済格差のみならず、家庭での教育的環境という養育格差問題についても言及している。家庭における経済格差と養育格差に関連していると考えられるものには、両親の学歴やライフスタイルというものが挙げられる。格差社会において最も問題視される現象とは、格差が再生産されていくことである。したがって、両親の学歴やライフスタイルにおける違いが、経済格差、養育格差につながり、その結果として、子どもの発達の結果に格差が生じ、格差が固定していくことが問題であると考えられる。

一方、欧米を中心として発展してきた発達精神病理学的な考え方では、子どもの発達の結果に否定的な影響を及ぼしうる要因をリスクファクターとして捉えている(Cummings, Campbell, Davies, 2006 菅原監訳)。この考え方を援用すると、経済的に恵まれない環境や、経済的に不安定な環境はいずれも、子どもの発達の結果に否定的な影響を及ぼしうるリスクファクターとして考えることができる。さらに、両親の養育行動の質も、子どもの発達の結果に否定的影響を及ぼす可能性がある場合は、リスクファクターとして捉えられる。発達精神病理学的研究からこれまで示唆されていることの一つに、単一のリスクファクターによって、子どもの発達の結果に影響を及ぼす可能性は極めて低いが、重複し、かつ長期的に継続することは、子どもの発達の結果に対するリスクを高める、ということがある。したがって、子どもの発達早期に開始され、継続する可能性を持つリスクファクターを短期的・長期的に検討していくことが重要である。

さて、これまで我が国の心理学的研究では、養育行動の質や養育態度と子どもの発達との関連について検討されて

きた。例えば、母親の拒否的な養育態度(戸ヶ崎・坂野, 1997)や母親の過保護的な養育態度(中台・金山, 2004)が子どものソーシャルスキルに否定的影響を及ぼすことや、子どもの問題行動に関連すること(中台・金山・前田, 2004)、両親の権威主義的養育態度と子どもの攻撃行動傾向との関連(中道・中澤, 2003)などが明らかにされている。一方で、両親の養育に影響する要因についての研究も行われており、両親が得ているソーシャルサポート(安藤・立石・荒牧・岩藤・金丸・丹羽・砂上・堀越・無藤, 2006)、子どもの気質(森下・森下, 2006)、親の被養育体験(数井・遠藤・田中・坂上・菅沼, 2000)などがその要因として挙げられている。しかし、我が国における、こうした研究のほとんどは、母親に対する質問紙調査によって得られたデータを用いており、具体的にどのような養育行動が観察されるのか、という観察研究は少ない。さらに、両親と子どもを取り巻く生態学的文脈(家族システム・機能状態、夫婦のライフスタイル・機能状態、文化、近隣の環境など、Cummings et al. (2006 菅原監訳))を視野に入れた研究はほとんど見られない。

そこで本研究では、夫婦のライフスタイル(社会属性的変数)に焦点を当て、これらが、母親による具体的な行動とどのように関連するのか、さらに、子どもの母親との行動とどのように関連するのかについて、検討することを目的とした。

方法

対象

2002年10月1日から2003年3月31日までに首都圏某市で誕生した0歳児について、3ヶ月検診時に保健所を通じて、参加依頼をし、調査に応諾した918名の母親を調査対象として登録した(菅原, 2004)。この対象に対し、郵送による質問紙調査を実施した結果、643世帯から回答が得られ、そのうち家庭での観察実施に応諾した175世帯について、観察調査を行った(2005年から2006年)。この

観察対象者のうち、2005年1月に実施された、2歳時点での質問紙調査において回答が得られた148世帯分（男子73名、女子75名分）のデータを分析に使用した。

測定内容

養育環境の観察記録尺度 米国立子ども人間発達研究所が開発した養育者（保育士）と子どもとの相互作用を測定するために開発された Observational Record of the Caregiving Environment（以下 ORCE, NICHD Early Child Care Research Network, 1996）の、一部改訂した日本語版 ORCE を家庭内での養育を観察する指標として用いた（菅原, 2004）。尺度作成には、ORCE 全尺度と実施マニ

アルを邦訳し、バイリンガルの研究者によって再翻訳されたものを、ORCE 原作者（Dr. Friedman）の校閲を経た。

ORCE は、44分間を1ターンとし、単位時間（30秒間）に出現する養育者と子どものコミュニケーション行動の頻度と、関わりの方質についての観察者の質的評価の2側面から測定する。30秒間観察し、30秒間で観察された行動を記入するという1分間の単位を10回繰り返す、その後2分間の質的評価を行う。これを3回繰り返すが、3回目の質的評価は10分間かけて行う。この44分間を1ターンとして、1回の家庭訪問で3ターン実施した¹。コミュニケーション行動の頻度（行動尺度）の各項目と定義を Table 1 に示す。

Table 1 ORCE 行動尺度の定義

項目	定義
肯定的・否定的な感情表現	
肯定的感情表現の共有	母親と子どもが互いに対する肯定的感情を表現しあうこと。一緒に笑ったり微笑みあう。
肯定的身体接触	母親が温かみのある、愛情のこもった身体接触をすること
肯定的アイコンタクト	母親と子どもの2秒以上の肯定的アイコンタクト
言語による相互作用	
肯定的発言	母親が温かみのある、愛情のこもった言語表現をすること。ほめことば
否定的発言	母親が否定的な発言をすること、意地悪なことを言う、敵意的な言い方をする、批判する、どなる、など
読み聞かせ	母親が本、雑誌などの文章（文字）を読みきかせること
質問をする	母親が子どもに質問すること
指示する	母親が子どもに指示、要求、禁止する（歌、ゲームを除く）
その他	以上のいずれにも当てはまらないもの
動機づけ	
教育的なかかわり	教育的スキル（読み、書き、算数能力）を伸ばすようなかかわり。運動発達促進を含む。
社会的ルールを教える	社会的ルールやモラルを教える。あいさつ、順番、ルールなど
友達関係調整	友達を用意する、友達のところに呼ぶ、友達の感情を言語化する
行動管理	
子どもの行動を促進	子どもの手助けをする、楽しませる、要求に応じる、活動を開始する
否定的身体的行為	子どもを罰する、コントロールするためにたたく、ゆする、引っ張る、子どもの動きを止める、おもちゃを取り上げる、など
子どもの活動を制限	言語的、身体的に子どもを制限すること。子どものしたいことをさせない
入れ物の中に入れる	子どもが自力では出られないようなもの（椅子など）に入れる
子どもの行動	
向社会的行動	他者を援助する、配慮する、おもちゃをあげる、なぐさめる、肯定的身体接触をする
身体的攻撃	他者をたたく、ける、噛む
言語的攻撃	他者に悪口を言う、けなす、傷つけるようなことを言う
否定的行動	攻撃的ではないが、否定的・非友好的にふるまう、おもちゃを取り上げる、他者の活動を邪魔する、めそめそ言う
大人に従う	大人の指示・否定的発言・質問などにコードされた指示や示唆に従う
大人に嫌という ／拒否する	大人の指示・否定的発言・質問などにコードされた指示や示唆に対し、自立性や主張性を見せて、拒否する
大人に反抗する	大人の指示・否定的発言・質問などにコードされた指示や示唆、コントロールに対し、怒ったり怒鳴ったり、禁止された行動をさらにしたりする

観察者は、心理学専攻の大学院生 18 名であり、観察トレーニングを 12 日間かけて行った。トレーニングビデオによる評定者間一致率は、行動尺度 29 項目で平均 87.8% (33.3 ~ 100%) であった。

夫婦のライフスタイル変数 夫婦の学歴(妻に対する調査、2003 年)、夫婦の 1 年間当たりの収入 (妻に対する調査、2005 年)、夫婦の 1 カ月当たりの労働時間 (夫婦それぞれに対する調査、2005 年) について、それぞれ質問紙によって調査した。夫婦のライフスタイルについての結果は、Table 2 に示した。

結果

結果の分析は、妻の就業の有無別、子どもの性別に行った。さらに、観察された行動尺度の一部が正規分布に従っていなかったため²、本研究においては、分析に順位相関

係数 (Spearman の ρ) を用いた (Table 3-5)。

専業主婦世帯の夫婦ライフスタイルと母子の行動との関連

子どもの性別によって、結果に大きな違いがみられた。子どもが女子の場合、夫婦の学歴、夫の収入、夫の 1 カ月当たりの就業時間と母親の行動との統計的に有意な関連はほとんど見出されず、夫の収入の多さと母親の読み聞かせの少なさ ($\rho = -.36, p < .05$) においてのみ、有意な関連がみられた。また、夫の就業時間の長ささと母親の肯定的感情表現の共有の少なさ ($\rho = -.29$)、否定的発言の少なさ ($\rho = -.31$)、子どもに対する指示の少なさ ($\rho = -.29$)、否定的身体的行為の少なさ ($\rho = -.29$) はいずれも有意傾向水準にとどまった。また妻の学歴の高さと否定的身体的行為の少なさ ($\rho = -.26$)、夫の学歴の高さと子どもを入れ物に入れることの多さ ($\rho = .27$) との間にも有意傾向水準の相関が示唆された (いずれも $p < .10$)。子どもの行動と

Table 2 夫婦のライフスタイル変数

		妻就業なし		妻就業あり	
		女子 (n = 52)	男子 (n = 52)	女子 (n = 23)	男子 (n = 21)
妻学歴	高校卒以下	11	7	4	5
	短大・高等専門学校卒	24	22	5	6
	大学卒	16	22	13	10
	大学院卒	1	0	1	0
夫学歴	高校卒以下	13	13	6	7
	短大・高等専門学校卒	6	4	0	2
	大学卒	28	24	14	11
	大学院卒	3	10	3	1
妻収入	200 万未満	---	---	7	12
	200 ~ 400 万未満	---	---	5	3
	400 ~ 600 万未満	---	---	3	1
	600 ~ 800 万未満	---	---	2	1
	800 万以上	---	---	1	1
夫収入	200 万未満	1	1	2	0
	200 ~ 400 万未満	3	1	1	1
	400 ~ 600 万未満	9	12	9	6
	600 ~ 800 万未満	12	14	3	8
	800 万以上	12	18	4	2
妻就労時間 (1 カ月当たり平均 (SD))	---	---	135.5 (86.2)	84.3 (66.2)	
夫就労時間 (1 カ月当たり平均 (SD))	185.9 (85.5)	204.5 (81.5)	231.3 (60.0)	197.3 (99.2)	

注) 就労時間以外は、項目を選択した人の人数。就労時間は記載された数値の平均値を使用した。

Table 3 妻の就業有無・子どもの性別 夫婦のライフスタイルと母子の行動の関連
(数字は Spearman の順位相関係数、無職妻、女子 $n = 52$ 、男子 $n = 52$)

	女子				男子			
	妻 学歴	夫 学歴	夫 収入	夫 就業 時間	妻 学歴	夫 学歴	夫 収入	夫 就業 時間
肯定的・否定的な感情表現								
肯定的感情表現の共有	-0.08	-0.13	-0.21	-0.29 †	.27 †	.19	.02	.10
肯定的身体接触	-0.05	-0.11	.03	-0.09	.92	.23	.18	-0.08
肯定的アイコンタクト	-0.01	-0.08	-0.20	-0.28	.44 **	.22	.41 **	.25
言語による相互作用								
肯定的発言	.18	.16	-0.12	.12	.21	.26 †	.07	-0.22
否定的発言	-0.01	.21	-0.12	-0.31 †	-.31 *	-.13	-.14	-0.08
読み聞かせ	.11	.07	-.36 *	-.24	.24 †	.11	.10	.02
質問をする	-.04	.16	.07	.20	.21	.28 *	.06	.03
指示する	.08	-0.01	.16	-0.29 †	-.26 †	-.21	-.26 †	-.15
その他語りかけ	-0.02	-0.12	-0.01	-0.25	.44 **	.29 *	.25 †	-0.01
動機づけ								
教育的なかかわり	-0.07	-0.11	-0.14	-0.21	.39 **	.26 †	.21	.19
社会的ルールを教える	-0.12	-0.07	-0.02	-0.04	.14	-.03	.59 **	.10
友達関係調整	.16	-0.08	.12	.24	-.19	-.24 †	.09	-0.10
行動管理								
子どもの行動を促進	-0.05	-0.05	.02	-.24	.44 **	.34 *	.41 **	.26
否定的身体的行為	-.26 †	-0.05	-0.11	-.29 †	-.11	-.22	-.09	.10
子どもの活動を制限	-0.04	.16	.08	-0.01	-.31 *	-.08	-.09	-.17
入れ物の中に入れる	.12	.27 †	.15	-.08	.05	-.09	.03	.26
子どもの行動								
向社会的行動	.12	-0.13	-0.04	.38 *	-.08	-.09	-.12	.19
身体的攻撃	-0.01	.07	.12	-.19	-.07	-.07	.02	-.28 †
言語的攻撃	---	---	---	---	-.08	.04	.01	-.23
否定的行動	-0.06	-0.13	.03	-.11	-.24 †	.02	-.25 †	-.26
大人に従う	-.16	-0.01	-0.05	-.35 *	.38 **	.26 †	.42 **	.31 †
大人に嫌という／拒否する	.03	.18	.04	.01	-.30 *	.01	.16	-.09
大人に反抗する	-.23	-0.11	.16	.03	-.08	.01	-.23	-.23

† : $p < .10$, * : $p < .05$, ** : $p < .01$

の関連では、夫の収入が多いほど、子どもが大人に従わない ($\rho = -.35, p < .05$) という負の相関も確認されたが、概して夫婦のライフスタイルと母子の行動との関連は、子どもが女子の場合は多く見られず、また母親の養育にとって肯定的に働くと思定された夫婦のライフスタイル変数(収入の高さや学歴の高さ、夫の就業時間の長さ)は、子どもの発達に促進的であると考えられる養育行動(読み聞かせなど)と負の相関関係にあることが示唆された。

一方、子どもが男子である場合、妻の学歴の高さと、子どもとの肯定的アイコンタクトの多さ ($\rho = .44, p < .01$)、否定的発言の少なさ ($\rho = -.31, p < .05$)、その他語りかけの多さ ($\rho = .44, p < .01$)、教育的なかかわりの多さ ($\rho =$

.39, $p < .01$)、子どもの行動を促進することの多さ ($\rho = .44, p < .01$)、子どもの活動を制限する頻度の少なさ ($\rho = -.31, p < .05$) が示された。夫の学歴の高さも同様に、母親の質問する回数の多さ ($\rho = .28, p < .05$)、その他語りかけの多さ ($\rho = .29, p < .05$)、子どもの行動を促進する行動の多さ ($\rho = .34, p < .05$) と有意な関連を示していた。夫の収入の高さも、子どもとの肯定的アイコンタクトの多さ ($\rho = .41, p < .01$)、社会的ルールを教える ($\rho = .59, p < .01$)、子どもの行動を促進する ($\rho = .41, p < .01$) と正の相関関係にあった。夫の就業時間の長さとも、妻の子どもに対する養育行動との間には有意な相関関係は示されなかった。子どもの行動との関連では、妻の学歴の高さと子

Table 4 妻の就業有無・子どもの性別 夫婦のライフスタイルと母子の行動の関連
(数字は Spearman の順位相関係数、有職妻、女子 $n = 23$)

	妻 学歴	夫 学歴	妻 収入	夫 収入	妻 就労 時間	夫 就業 時間
肯定的・否定的な感情表現						
肯定的感情表現の共有	-.04	.05	-.20	-.43 †	.20	-.13
肯定的身体接触	.21	-.09	-.28	-.56 *	.11	-.01
肯定的アイコンタクト	.05	-.13	-.56 *	-.23	-.06	.20
言語による相互作用						
肯定的発言	-.14	-.18	-.44 †	-.41 †	.05	-.09
否定的発言	.15	.30	.03	.41 †	.06	-.03
読み聞かせ	.19	-.01	.30	-.15	.53 **	-.10
質問をする	-.14	-.23	-.12	-.44 †	.24	.18
指示する	-.17	-.06	.39	.44 †	-.10	-.10
その他	.03	-.16	-.41 †	-.40 †	.08	-.03
動機づけ						
教育的なかかわり	.25	.08	-.58 *	-.25	.08	-.08
社会的ルールを教える	-.08	.03	.09	-.23	.14	.33
友達関係調整	-.06	-.12	-.39	-.24	-.22	.35
行動管理						
子どもの行動を促進	.04	-.23	-.39	-.52 *	.24	.21
否定的身体的行為	-.18	.06	---	.34	-.16	.26
子どもの活動を制限	-.12	-.04	.45 †	.18	.34	.02
入れ物の中に入れる	-.03	.08	.07	.27	-.08	.21
子どもの行動						
向社会的行動	-.30	-.02	.22	.03	-.06	-.26
身体的攻撃	.11	.28	.06	.44	.05	.03
言語的攻撃	---	---	---	---	---	---
否定的行動	-.29	-.04	-.16	.23	-.03	.11
大人に従う	.06	-.00	-.29	-.22	.20	.24
大人に嫌という／拒否する	-.10	.04	.08	.12	-.17	.27
大人に反抗する	.07	.31	.27	.25	.24	-.04

† : $p < .10$, * : $p < .05$, ** : $p < .01$

どもの指示に対する行動（大人に従う $\rho = .38, p < .01$ 、大人に嫌という、拒否する $\rho = -.38, p < .05$ ）との間に統計的に有意な関連が示された。夫の収入の高さも、子どもが大人の指示に従う頻度の高さと有意な関連を示していた（ $\rho = .42, p < .01$ ）。以上から、子どもが男子である場合には、夫婦の学歴の高さや夫の収入の多さといった、社会経済的地位の高さが子どもの発達に促進的であると考えられる養育行動（肯定的アイコンタクトや、否定的発言の少なさ、教育的かかわりの多さ、など）と関連しているだけでなく、子どもの大人に従う行動の多さとも関連していることが示唆された。

有職妻世帯の夫婦ライフスタイルと母子の行動との関連

母親が専業主婦の世帯と同様に、子どもの性別によって結果に違いがみられた。まず、子どもが女子である場合、夫婦の学歴と、子どもに対する行動と統計的に有意な関連は見られなかった。統計的に有意な関連の見られたものは、妻の収入の多さと子どもに対する肯定的アイコンタクトの少なさ（ $\rho = -.56, p < .05$ ）、教育的かかわりの少なさ（ $\rho = -.58, p < .05$ ）と、夫の収入の高さと妻の子どもに対する肯定的身体接触の少なさ（ $\rho = -.56, p < .01$ ）、子どもの行動を促進する頻度の少なさ（ $\rho = -.52, p < .05$ ）、そして妻の就労時間の長さとして子どもに対する読み聞かせの多さ（ $\rho = .53, p < .01$ ）が示された。そのほか、夫婦の収入と

Table 5 妻の就業有無・子どもの性別 夫婦のライフスタイルと母子の行動の関連
(数字は Spearman の順位相関係数、有職妻、男子 $n = 21$)

	妻 学歴	夫 学歴	妻 収入	夫 収入	妻 就労 時間	夫 就業 時間
肯定的・否定的な感情表現						
肯定的感情表現の共有	.44 *	-.13	-.03	-.27	-.10	-.16
肯定的身体接触	-.28	-.02	.16	.12	.23	-.30
肯定的アイコンタクト	.03	.28	.36	.13	.28	-.34
言語による相互作用						
肯定的発言	.01	-.36	-.14	-.12	-.32	-.15
否定的発言	.11	-.02	-.03	.01	.04	.35
読み聞かせ	.19	-.14	-.01	-.08	.19	.27
質問をする	.24	.08	.18	.03	.02	.17
指示する	.01	-.02	-.38	-.27	-.31	.17
その他	.07	.18	.16	.20	-.01	-.24
動機づけ						
教育的なかかわり	.08	.32	.13	.27	.32	-.39
社会的ルールを教える	.11	-.04	-.01	-.04	.16	-.53 *
友達関係調整	-.05	-.01	-.29	-.17	.14	-.23
行動管理						
子どもの行動を促進	.21	.33	.31	-.08	.25	-.48 *
否定的身体的行為	-.16	.30	.08	.04	.02	.37
子どもの活動を制限	.01	.14	.23	.10	.26	.22
入れ物の中に入れる	-.39 †	.04	.08	.06	.09	.54 *
子どもの行動						
向社会的行動	-.15	-.29	-.36	.00	-.03	.03
身体的攻撃	-.02	-.25	-.21	-.25	-.34	.36
言語的攻撃	-.10	-.29	-.21	.11	.02	.11
否定的行動	.02	.05	.02	.16	.14	.16
大人に従う	.25	.06	.54 *	.24	.17	-.25
大人に嫌という／拒否する	.12	.32	.25	.17	.23	-.09
大人に反抗する	.20	.05	.00	-.04	-.18	.24

† : $p < .10$, * : $p < .05$, ** : $p < .01$

養育行動との間には有意傾向水準の関連が示唆されたが、いずれも収入の高さが、一般的に子どもの発達に促進的であると考えられる行動と負の相関関係にある傾向が示された（肯定的感情表現や肯定的発言の少なさなど）。夫の就業時間は、養育行動と有意な相関がみられなかった。また、子どもの行動も、夫婦のライフスタイル変数といずれも有意な相関関係になかった。

子どもが男子である場合には、妻の学歴の高さと子どもと肯定的な感情表現を共有する頻度の高さ（ $\rho = .44, p < .05$ ）、夫の就業時間の長さ、子どもに社会的ルールを教える頻度の低さ（ $\rho = -.53, p < .05$ ）、子どもの行動を促進する傾向の低さ（ $\rho = -.48, p < .05$ ）、入れ物の中に入れる頻度の高さ（ $\rho = .54, p < .05$ ）との関連がみられた。夫の

学歴、夫婦の収入、母親の就業時間は、いずれの養育行動変数とも有意な関連が見られなかった。子どもの行動に関しては、妻の収入が高いほど、子どもが大人の指示に従うことが示された（ $\rho = .54, p < .05$ ）。以上から、子どもが男子である場合には、妻の学歴が高いほど、夫の就業時間が短いほど、子どもの発達に促進的であると考えられる行動（肯定的感情表現、教育的なかかわりの多さや行動制限の少なさ）と関連していることが示唆された。

考察

本研究では、夫婦のライフスタイルと（主に母親である）養育者と子どもの相互作用において観察される両者の行動

(頻度)との関連を検討した。妻の就労の有無、子どもの性別に相関関係を検討したところ、子どもが女子である場合には、男子であるときほど、ライフスタイル変数と養育者の行動との関連が示されなかった。その上、子どもが女子である場合には、一般的に子どもの養育にとって有利であると考えられる、両親の学歴の高さや収入の多さは、子どもの発達に促進的な養育行動と負の相関関係にあることが示唆された。この傾向は、妻の就労の有無に関わらず示された。一方、子どもが男児であり、かつ妻が専業主婦である場合には、養育行動と夫婦のライフスタイル変数との多様な関連が示され、いずれも社会経済的地位の高さが、一般的に子どもの発達に促進的であると考えられるような養育行動と正の相関関係にあることが示された。関連するライフスタイル変数の数は減じられるが、妻が有職である場合も、子どもが男子であれば同様の傾向が認められた。

子どもの性別によって、ライフスタイル変数と養育行動との関連が異なっていたことの要因として、まず挙げられるのは、子どもの性別によって養育者にかかる負荷の大きさが異なることがあるだろう。先行研究より、子どもが男子である場合に、養育者の育児負担が高いことが示唆されている (Crnic & Greenberg, 1990)。ストレス研究の枠組みでは、ストレスが積み重なるほど、否定的影響が大きくなることが示唆されており、したがって、男子の子育てであるというストレスフルな状況に加えて、社会経済的なストレス因子が加わることによって、養育行動に否定的な影響があらわれていることを示す結果であると考えられる (Grzywacz, Almeida, Neupert, & Ettner, 2004; Webster-Stratton, 1990)。一方、女子では、養育のストレスが大きくないため、社会経済的なストレス要因が養育行動に大きく影響することが少なかった可能性が挙げられる。しかしながら、この説明では、女子と男子で、いくつかの相関係数の正負が逆転していたことは説明できない。このことについて、詳細な検討を加えるためには、子どもの性別によって、養育行動傾向が異なるかどうか³、あるいは、より適切な養育行動が異なるかどうかを検討することが重要である。また、特に専業主婦世帯では、観察対象となった養育者が母親であったことも関連すると考えられる。先行研究によれば、養育者と子どもの性別の組み合わせによって、養育行動(態度)が異なることが示唆されており (Noller, 1980)、本研究で示された結果もこうした違いを反映したものであるかもしれない。これらについて明らかにするためには、実際の養育行動が、短期的・長期的に子どもの発達にどのように関連しているかを検討すること、さらには、父親の養育行動にも焦点を当てた検討をすることが重要である。

妻の就労の有無というライフスタイルの違いによって、

結果に違いが見られたことの要因としてまず挙げられるのは、観察時の状況の違いである。専業主婦世帯では、平日に観察調査を行うことが多かったため、母子のみの観察を行うことがほとんどであった。しかしながら、就労妻世帯では観察は休日に行われることが多かったため、母子に加えて父親がその場にいることも少なくなかった。配偶者の存在が養育行動に影響を及ぼすことが先行研究により示唆されており (Belsky, 1979)、観察状況の違いが結果の違いに影響を及ぼした可能性がある。さらに、母親の就労がストレス因として作用している可能性がある。たとえば、仕事と家庭の両立のために、多重役割を遂行することの困難さを体験することが否定的影響を及ぼすとすスピルオーバーについての研究がある (小泉・福丸・中山・無藤, 2007)。しかしながら、小泉他 (2007) の研究を含め、先行研究の結果からは、母親の就労が、母親の心理的不適応や育児ストレスを高めるような働きをするという一貫した研究結果は得られておらず、むしろ母親の就労による肯定的な影響も散見される (就労母親における育児ストレスの低さなど、金 (2004))。母親の就労による影響について検討するためには、就労の有無という大きな枠組みでとらえるのではなく、就労形態、拘束時間、賃金や地位といった社会的属性の側面だけではなく、就労に対する態度、役割への満足感、充実感といった心理的な側面、さらには子育てサポートに対する満足感など、多面的にとらえることが重要である。こうした変数による影響を取り除いたうえで、専業主婦世帯との比較を行うことで、就労という一つのライフスタイル変数による影響を検討することができると思われる。

今後の研究課題として、本研究で分析対象とした養育行動が、子どもの発達においてどのような機能を果たしているのかについて、短期的・長期的影響プロセスについて検討すること、その際の子どもの性別の調整変数としての機能を検討することである。これらについて検討することによって、夫婦のライフスタイルが、子どもの養育環境格差としてどのような影響を持つのか、困難な状況にある夫婦の子育てサポートにはどのような支援が必要なのかについてより詳細な検討を行うことが可能になると考える。

(謝辞)

本研究は、菅原ますみ先生をはじめとした共同研究の一部です。縦断観察調査にご協力くださいましたご家族の皆様、ご指導くださいました先生方に深く感謝申し上げます。

(注)

- 1 NICHD ECCRN による ORCE のマニュアルでは、1 回の家庭 (保育所) 訪問につき、2 ターン実施し、2 週間以内に 2 度訪問することになっていたが、我が国での事情を勘案し、1 回の訪問で 3 ターンの実施をすることで代替とした。

- 2 正規分布に従っていなかった行動尺度は、養育者の肯定的身体接触、否定的発言、読み聞かせ、指示、社会的ルールを教える、友人関係調整、否定的身体接触、活動制限、入れ物に入れる、の9項目と、子どもの向社会的行動、身体的攻撃、言語的攻撃、否定的攻撃、大人に反抗する、の5項目であった。いずれの項目も、正の方向（右にすそ野が長い形）への歪みが確認され、非線形変換によっても正規分布化することができなかった。
- 3 ただし、単純に養育行動が子どもの性別によって異なるかどうかを検討した結果（*t*検定）、肯定的感情の共有において、女子に対するほうが頻度が高かった以外（ $t(139) = 3.16, p < .05$ ）、有意な差は確認されなかった。

(引用文献)

安藤智子・立石陽子・荒牧美佐子・岩藤裕美・金丸智美・丹羽さかの・砂上史子・堀越紀香・無藤 隆 (2006). 幼稚園児を持つ母親のソーシャル・サポート. お茶の水女子大学子ども発達養育研究センター紀要, 3, 31-37.

Belsky, J. (1979). Mother-father-infant interaction: A naturalistic observational study. *Developmental Psychology*, 15, 601-607.

Crnic, K. A., & Greenberg, M. T. (1990). Minor parenting stresses with young children. *Child Development*, 61, 1628-1637.

Cummings, E. M., Campbell, S. B., & Davies, P. T. (2006). 発達精神病理学—子どもの精神病理の発達と家族関係. 京都: ミネルヴァ書房.

Grzywacz, J. G., Almeida, D. M., Neupert, S. D., & Ettner, S. L. (2004). Socioeconomic status and health: A micro-level analysis of exposure and vulnerability to daily stressors. *Journal of Health and Social Behavior*, 45, 1-16.

数井みゆき・遠藤俊彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹 (2000). 日本人母子における愛着の世代間伝達. 教育心理学研究, 48, 323-332.

金愛慶. (2004). 既婚女性の生活ストレスと健康の関連—専業主

婦と兼業主婦間の比較—. 白梅学園短期大学紀要, 40, 19-30.

小泉智恵・福丸由佳・中山美由紀・無藤 隆 (2007). 妊娠期の女性の働き方と心理的健康. お茶の水女子大学子ども発達教育センター紀要, 4, 1-13.

森下順子・森下正康 (2006). 幼児の気質が母親の行動特徴と養育態度に及ぼす影響. 和歌山大学教育学部紀要 教育科学, 56, 43-50.

中台佐喜子・金山元春 (2004). 母親の養育態度が幼児の社会的スキルに及ぼす影響. 家庭教育研究所紀要, 26, 61-66.

中台佐喜子・金山元春・前田健一 (2004). 母親の養育態度が幼児の問題行動に及ぼす影響—養育態度→家庭における問題行動→園における問題行動というプロセスの検討—. 広島大学心理学研究, 4, 151-157.

中道主人・中澤 潤 (2003). 父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連. 千葉大学教育学部研究紀要, 51, 173-179.

NICHD Early Child Care Research Network. (1996). Characteristics of infant child care: Factors contributing to positive caregiving. *Early Childhood Research Quarterly*, 11, 269-306.

Noller, P. (1980). Cross-gender effects in two-child families. *Developmental Psychology*, 16, 159-160.

菅原ますみ (2004). 乳幼児の心身に及ぼす養育の質 (care quality) に関する研究—保育所乳児保育での保育師と子どものコミュニケーションの検討—. 財団法人 こども未来財団.

戸ヶ崎素子・坂野雄二 (1997). 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応に及ぼす影響. 教育心理学研究, 45, 173-182.

Webster-Stratton, C. (1990). Stress: A potential disruptor of parent perceptions and family interactions. *Journal of Clinical Child Psychology*, 19, 302-312.

読売新聞 (2009, 8 5). 全国学力テスト分析、親の収入高いほど高学力. Retrieved 4 19, 2010, from Yomiuri Online: <http://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/news/20090805-OYT8T00352.htm>

The Relationship between Couples' Life Style and Parenting Environment: Using Observations of Parenting Behaviors

Akiko KAWASHIMA

(Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science (Chiba University))

This study examined the relationship between couples' life style variables (including educational background, incomes, working hours per month, and wives' employment) and observed parent-child interactions. The data of 148 families (73 boys and 75 girls) from the Better Developmental Environment for Children Project (Sugawara, 2004) were examined in this study. The quality of parenting environment was assessed by observation applying the translated and revised version of the Observational Record of the Caregiving Environment (ORCE, NICHD Early Child Care Research Network, 1996) for home observation. Each child was observed for three 44-minute observation cycles at home with his/her parent(s). The maternal behaviors were counted if they fitted into behavior checklists of the ORCE. The categories of maternal behaviors were; positive or negative emotional expression, language interaction, cognitive and social stimulation, and management. Couples' life style variables were assessed by the self-reported questionnaire from wives and husbands. The result suggested that the correlations between the observed mother-child behaviors and couples' life style were moderated by children's sex and maternal employment. Overall, couples' higher socioeconomic status related to mothers' positive emotional expression and academic and social skill teaching behaviors only for boys. For girls, the socioeconomic status did not relate to the most of these maternal behaviors, and moreover, some of the relationship found to be inverted, i.e. the higher socioeconomic status related to lower rate of maternal positive emotional expression and skill teaching behaviors. For working mothers, the correlations among maternal behaviors and couples' life style variables were less statistically significant than those who did not work. However, the valences of the correlation coefficients for boys and girls who had working mothers had the same trend as those were shown in the full-time homemaker mothers. These results were discussed from the perspective of the parenting stress studies. Future directions for research were also discussed.

Keywords: parenting behavior, parenting environment, life style for couples, socioeconomic status, observation